

水源連のコメント

9月10日起きた鬼怒川決壊について

9月10日起きた鬼怒川決壊について詳しい記事をお送りします。堤防が決壊すると、凄まじい被害をもたらすことをテレビの映像で目の当たりにしました。

鬼怒川の上流には四つのダムがあり、そのうちの湯西川ダムはつい最近、2012年に完成しましたが、これらのダムによる洪水調節は今回、鬼怒川下流部の洪水位の低減にさほど寄与しなかったように思われます。

鬼怒川は中流部で川幅が大きく広がる河川で、その河道貯留効果が働くため、洪水ピーク流量は中流部より下流部が小さくなる傾向がありますが、今回は下流部で流量が急増しました。

今回の常総市での決壊は、主に中下流域の豪雨によって流量が急上昇したことによるものと推測されます。

現在、鬼怒川の各地点の水位変化と、ダム放流量のデータを整理しておりますので、後日、その結果をお伝えします。

今回の決壊事故は堤防強化こそが喫緊の治水対策であることをあらためて認識させるものになりました。

ソイルセメントや鋼矢板を使った安価な堤防強化工法があるのですが、国交省は土堤原則（堤防は土でつくるもの）をたてに、これらの安価な堤防強化工法の導入を拒んでいます。

このような国交省の頑な姿勢が続く限り、今回のような悲惨な決壊事故が他でも起きると予想されます。

（9月11日付けの「朝日新聞」の記事

記録的な豪雨、改修予定の堤防襲う 鬼怒川決壊

国管理の1級河川・鬼怒川で起きた堤防の決壊は、茨城県常総市に大きな被害をもたらした。気象庁による警戒の呼びかけや、自治体の避難指示は住民にどう伝わったのか。茨城県常総市で堤防が決壊する予兆は、鬼怒川を管理する国土交通省も把握していた。上流の栃木県で9日から強い雨が続き、10日午前6時すぎに決壊場所から約5～25キロ上流の3カ所で、水が堤防を越えてあふれる「越水」が発生。堤防から水が漏れる「漏水」も2カ所であった。

決壊場所から約10キロ下流の同市水海道本町の観測地点の水位は10日早朝から急上昇。午前7時には5・62メートルと、いつ氾濫（はんらん）してもおかしくない「氾濫危険水位」（5・3メートル）を上回り、午後1時すぎには水位が8メートルを超えた。

国交省は、上流に四つあるダムで東京ドーム70杯分を超える約9千万立方メートルをため、水量を抑えようとした。職員がパトロールしようとしたが、増水で昼前には堤防に近づけない状態になり、午後0時50分に決壊したという。

国交省によると、堤防は高さ3～4メートル、底辺の幅約30メートルで、建設時期は不明。一般的に堤防の決壊は、「越水」による堤防の浸食や、水が堤防にしみこむことで起きる。国交省幹部は「あまりにも水量が多く堤防が耐えきれなかった」と話す。

東大の高橋裕名誉教授（河川工学）は「日本の堤防は、基本的に土の構造物。越水が30分も続けば堤防の土が削られ、通常は決壊する」と指摘する。応急措置として、堤防に土嚢（どのおう）

を積む方法もあるが、今回は川に近づけず防ぎようがなかったとみる。

当初は20メートルだった決壊の幅は、午後5時時点で140メートルに広がった。国交省は近くポンプ車15台を派遣し、浸水地域の排水に取りかかる。

国交省によると、現場付近の鬼怒川は河川法に基づく計画で、「10年に1度の大雨に耐えるため」(同省)、堤防のかさ上げや拡幅工事をする予定だった。だが、工事は20キロ下流の利根川との合流地点から上流に向かって順番に進めているため、現場付近では昨年度から用地買収を始めたばかりだった。改修が必要な堤防のうち整備が終わったのは44%にとどまっているという。川の堤防は年に2回、職員が安全性を確認する。現場付近では8月28日に点検したが、異常はなかったという。